

〔特集〕歴史的環境整備のあり方

佐賀県における史跡の保存整備

—特別史跡基肄城跡・名護屋城跡並陣跡・吉野ヶ里遺跡—

佐賀県文化財課 田 平 徳 栄

●佐賀県文化財元年

平成元年の幕明けは、佐賀県にとって特別な意味をもつ時代の幕明けとなった。この年の2月、突如襲った「吉野ヶ里ショック」は、連日のマスコミ報道でさらに増幅、加速され、我々の予想をはるかに越える巨大なうねりとなって、開発側も保護側も、あらゆる人々の思惑を一気に呑み込んでしまった。

2月23日、まず朝日新聞とNHKが吉野ヶ里遺跡を報じた。次の日には数千人の見学者が、調査中の何も無い穴ボコだらけの遺跡に押しかけた。「1週間もたてば、騒ぎも収まるだろう」との思いをよそに、日を追って見学者の群は膨れあがり、1日数千人から1万人、さらに数万人へと増え、多い日にはかるく10万人をこえるに至った。

行政側にはこのような急激な事態に対応できる体制はもともと無いのだから、こうなると大変である。今でも忘れない。或る日、職場は戦場と変わり、通常業務も係も、家庭も休日もあったものではなく、間断なく押しかけ勢いを増す見学者とマスコミの対応に追いまくられた。民家の軒先も何のその、止め散らかす車の整理、そして拳句の果ての口論。何処に行ったらよいのか、何を見たらよいのか、わけも解からずうごめき回わる見学者の

群の誘導。観光旅行会社が急抛し立てたバスに乗って来たらしい酔っぱらいのオッサンが、突然喰ってかかるてくる。「穴ボコだらけで何だこれは一体！行けば解かると言われて来たんだ、案内ぐらいしろ！」

観光地ではないし、第一こちらが呼んだわけでもないことを縷々説明すると、今度は添乗員が呼びつけられてしまっていた。

「吉野ヶ里の成功おめでとうございます」部外者からかかってくるこのような電話を、やりきれない複雑な思いで聞いたこともある。

吉野ヶ里遺跡が一夜にして全国的な関心事となったあの時の騒動は、遺跡そのものの価値とは別のところで、或る人が言ったように“日本人の生理”ともいえる邪馬台国イメージが見事に重なった結果生じた、一種の共同幻想にちかいものであったであろう。ただ、そのことから我々は、遺跡が人々の心に訴えかける根元的な力や、今日的な意味など、多くのものを学んだ。

今日の遺跡をめぐっては、適切な活用策なくして保存そのものも困難であるという現実がある。したがって、従来のように単に保存するだけではなく、如何にこれを地域づくりに生かしていくか、という視点が必要になってきており、それだけに今後の保存整備事業

に寄せられる期待は実に大きいものがあるといえよう。静的な、あるいは動的な様々な整備により遺跡は再び命をとりもどして現代によみがえり、人々に近づくことができる所以である。

佐賀県には、全国58ヶ所の特別史跡のうち、三つの特別史跡が存在する。^{き いじょうあと}基肄城跡・名護屋城跡並びに陣跡・吉野ヶ里遺跡について、個々の整備あるいは整備計画の概要を紹介し、それぞれが抱える問題点に触れることにしよう。

●特別史跡「基肄城跡」の保存整備計画

基肄城跡は佐賀県の東端、基山町にある。史上有名な白村江の戦で日本が新羅・唐の連合軍に敗れ、朝鮮半島からの撤退を余儀なくされたあと、国土防備の必要から、天智4年(665)に大宰府の大野城などと共に築かれたわが国最古の古代山城である。基山(標高約400m)を中心として尾根上を約3.4kmにわたって土壘が一周し、その城内に40棟をこえる礎石建物跡と、3ヶ所ないしは4ヶ所の城門跡が知られる。このような構造は、『日本書紀』に百濟からの亡命軍官が築城指揮に当たったとある記述を裏付けるもので、朝鮮式山城の特徴を如実に示すものである。

しかしながら、これまで基肄城に関する知見はきわめて少なく、発掘調査は昭和50年に礎石建物跡1棟について行われたにすぎない。整備も、山頂付近からの展望と一部遊歩道が設定されている程度で、ほとんど手つかずのままの状態にあり、城域内一帯に杉松の植林がなされている。城外北側斜面は早くから草スキー場に利用されており、シーズンには県内外から多くの子供連れが訪れ、むしろ基肄

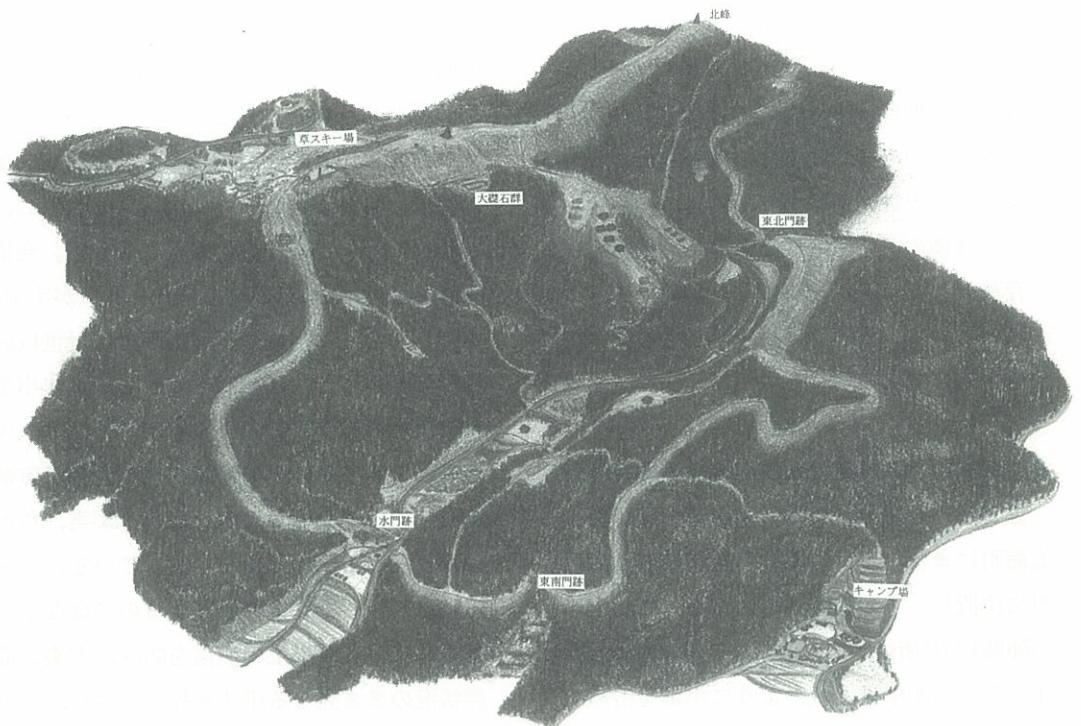
城といえば、遺跡よりもこちらの方がよく知られている。ただし、^{き ざん}基山すなわち基肄城跡に対する町民の関心は高く、町が行なった住民の町の将来計画に関する要望アンケートでは、基肄城跡の整備が1位を占めた。町民であれば子供の時分から誰でも一度は登る山、町名の由来ともなっているふるさとのシンボル、そして全国的にも貴重な特別史跡。まさに基肄城跡は基山町そのものとして地元民の気持の中にあることを示す結果であろう。そのため町では、この基肄城跡の将来的な整備活用を目指し、平成2年度から整備委員会を組織して整備計画の策定を進め、平成4年度までに基本計画策定までを終えている。

基本計画の概要は、主に次のような内容となっている。

1. 尾根上を一周する約4.4kmの土壙上に遊歩道を設置し、いくつかのビューポイントからのすぐれた眺望をきかせて城内の建物群や太宰府方面を一望することにより、見学者が基山の自然を楽しみながら視覚的に基肄城跡を理解できるようにする。いわば実大の模型を眼前にするわけである。また、この遊歩道の設置は、現在土壙線上に植わっている杉松を帶状に伐採することになるので、全域を空から、あるいは遠くから見れば一つの巨大なミステリーサークルのように映って、基山のランドマークとなるものである。

2. 硎石建物跡はいくつかのまとまりを群として整備し、当時の倉庫群の様子を視覚的に表現する。城内にはおよそ10群に別かれて40棟からの礎石建物群があるが、とくに中央の丸尾礎石群の4~5棟と、山頂に近い大礎石群と呼ばれる司令台的な1棟が中

鳥瞰図（基肄城跡）



核的な役割をもち、丸尾礎石群は数棟の建物を復元し、林間広場としても様々なイベント等にも活用する。

3. よく知られる南水門と、他3ヶ所の城門跡は保存修理を行う。南水門は高さ8m、長さ26mの規模の石壘が谷を塞ぎ、下位に谷水を逃がすための通水孔をもつことからその名があり、脇に門が付設されていたと推定されている。台風などのたびに石壘の崩落が進み、最も保存修理に緊急性を要する遺構である。その他の城門跡も傷みが著しい。

4. 説明板や資料館、ガイダンス施設等の整備を行う。史跡全体は約70haの広さをもつ。そのため、資料館を中心としていかに見学コースを設定し、効果的な説明、サインを提供するかが重要な鍵となる。基肄城跡を

理解することから地域を知り、日本の古代史、さらには当時の国際状況までおのずと触れることになる。

5. その他、駐車場、便所等の便益施設整備。

もちろん、これらの整備は一体的になされるべきであろうし、長期的な事業にならざるを得ないであろう。解決しなければならない問題も多い。とくに大きな問題は公有化である。現在の指定地のうち公有化されているのは頂上部の3.4ha弱にすぎず、圧倒的に多い植林地は全て私有地である。土壠線上の樹木伐採と遊歩道の設置にしても、礎石建物群の復元整備にしても、あらゆる整備において公有化が前提となるが、その面積は膨大なものであり、財源の確保等に相当な困難を覚悟しなければならないであろう。また、事前の発掘調査や整備に関わ

る体制、保存整備手法、管理など、そのほかにも多くの難問が山積している。

それにもかかわらず、この基肄城跡の保存整備に期待は大きい。それは基肄城跡が本来的に内抱する魅力、すなわち一国史に関わる歴史性、遺跡としてのスケール、今日では極めて稀ともいえる無垢な遺構の保存状況などあらゆる点から、地域づくりの素材として、極めて有用な可能性を秘めているからである。

●特別史跡「名護屋城跡並陣跡」の保存整備

佐賀県の西北端にあたる鎮西町・呼子町・玄海町にまたがる。本城の名護屋城跡は鎮西町に位置し、その周囲3町にわたって諸大名の陣跡120ヶ所余が広く分布する。陣跡の場合、1ヶ所づつが中世山城のように小山を占めているので、中心となる鎮西町では町全体が陣跡で出来上がっていると言っても過言ではない。文禄慶長の役（1592～1598）の折、朝鮮半島への侵略の根拠地となった城で、いわば豊臣秀吉の野望の跡をとどめる史跡である。

昭和51年度に初めて陣跡の分布調査を行った。それまで、おおまかな位置図で誰々の陣という比定はなされていたが、実際に歩いてみると雑木林や畠の中に石垣や土塁がよく残り、しかもそれぞれが広大で、数の多さに改めて驚かされたことを憶えている。その後、昭和53年度から、羽柴秀保障跡を皮切りに、保存整備委員会での検討をベースに文化庁の指導を受けながら、発掘調査と保存整備が進展している。これまで整備を目的として発掘調査を行なった陣跡4ヶ所、その他確認調査例は数多い。しかし保存整備を実施した陣跡はまだ3ヶ所にすぎず、進展は遅い。これは

当初の見込み以上に各陣跡の規模が大きく、また調査によって意外な所見やますます多くの難問に出くわし、調査、整備が予想以上に時間を要した結果である。

一方、本城は昭和51年度から発掘調査と保存整備に着手し、これまで山里丸と大手口、搦手口など一部の整備が終了している。発掘調査、整備とも国庫補助事業として県が実施、そのうちとくに本城の石垣修理は中近世城郭保存修理として、昭和54年度から5ヶ年事業に取り組んできた。名護屋城跡の石垣は、天草の乱でキリストンの籠城を恐れた幕府方が主要部の破壊を命じたといわれ、事実、角石はほとんどが崩れ落ちてしまっている。石垣修理はこれらを完全に復元するのではなく、基本的にはこれ以上の崩落を防ぎ、本来の遺存状況のまま見せる手法を採っており、そのため落石溜りはそのままの状態に置いてある。元々、名護屋城跡は周囲の風景とあいまつた荒城の趣きで人気が高い。必要以上の復元によりかえって遺跡の価値を損ねることは勿論慎むべきであろうし、復元を極力抑え、現状を正確に保存する手法によっても、名護屋城跡の魅力は決して失われはしない。当時としては大坂城に次ぐ規模を誇りながら、玄界灘を見はらす丘陵先端にポツンと忘れられた歴史の証人——、天守台に立つと、他所の城郭以上に様々なイメージをかき立てられるものがあるのは、そのような景観がよく保たれているせいであろう。

なお、平成5年3月には永年待ち望まれた県立名護屋城博物館が竣工し、10月頃のオープンを目指して現在準備が進められている。名護屋城跡を中心に文禄慶長の役がもつ歴史的意味を多くの人に伝えることは勿論として、

今後の調査・整備の核としても、また日韓友好の架け橋として、さらには史跡観光を中心とした地域活性化の起爆剤としても多いに期待が寄せられている。

これら保存整備や博物館建設を進めるに当たって、名護屋城跡並陣跡が抱える、忘れてはならない基本的に重要な観点が一つある。それはこの城が文禄慶長の役の折、朝鮮半島侵略の根拠地となったという、いわば日本史における日韓交流史の暗部にいやおうなく正面せざるを得ないという点である。彼地の人々に言い尽し難い苦難を与えたことは覆い隠しようのない歴史的事実であり、肥前の特産となつた陶磁器のような輝やかしい文化さえ、その悲惨な侵略が結果としてもたらした記念物である。そして、この侵略戦争は、戦前における日本の朝鮮半島支配とも見事に重なつて、400年の時間に風化されることなく記憶され、現代史の中でも語りつがれている。

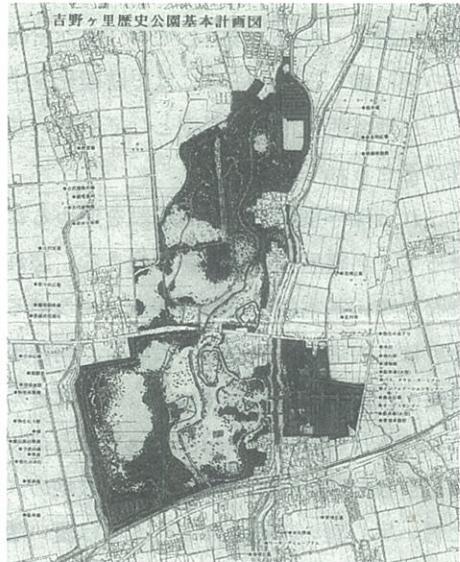
名護屋城跡並陣跡の調査・保存整備の進展は、遺跡としての学術的重要性を高めるであろうが、その一方では過去の暗い歴史をも暴き出していくことになる。しかしながら、そうだからといって、過去の贖罪意識だけで今後の事業展開を図ろうとするのは、日韓両国の今後の友好にとっても決して有益な成果を生まないであろう。たしかに微妙で困難な問題ではあるが、基本的に調査・保存整備を通じて歴史的事実を正確に把握することがまず重要であり、そのことが名護屋城跡並陣跡の整備の基本理念であり、過去の歴史を踏まえながら日韓両国の将来的に不变の平和友好の礎を築くうえで、出発点となるものであろうと信じている。

●特別史跡「吉野ヶ里遺跡」の保存整備計画

弥生時代のクニの姿を想像させる遺跡として、平成元年2月の新聞報道以来、一躍全国的に有名になり、現在でもたえず様々な話題を提供し続けている。平成2年5月に環濠集落や墳丘墓を含む遺跡の主要部分約22haが国の史跡に指定され、翌3年9月に特別史跡に昇格した。平成4年10月には国営歴史公園として整備されることが閣議決定され、現在、県による用地買上げ、建設省を中心に国・県・地元が一体となった計画づくりが進められている。そもそも、県の工業団地造成のため事前の発掘調査を実施した結果、その内容が明らかになり、保存を望む圧倒的な県内外の多くの人達に支えられて、工業団地から遺跡保存へと方針が一大転換し、今日に至つたものである。

平成元年10月から、仮整備した一部の復元建物や展示館などを一般に公開し、これまで700万人をこえる見学者があった。この間、開発と遺跡保存をめぐる争闘、遺跡活用の今日的意義、見学者への現実的対応等々、様々困難な問題が短期間のうちに、しかもマスコミ、議会でもまれる中であらゆる角度からにぎやかに論じられてきた。過去、一つの遺跡の取り扱いがこれほど多くの人々の関心をひいたことはないであろうし、それだけにまさに今日的とも言うべく、遺跡の保存整備が抱える多面的な課題がそこに全て提示されている。

なお、現在の公開施設はあくまで仮整備であって、駐車場・売店の運営、ガイド事業等は地元の保存協力会が行っている。それでも、修学旅行など団体客を中心に、見学者数は毎年100万人を優に越えて安定した数字を示している。その背景には、この吉野ヶ里遺跡が多



くのマスコミにとりあげられ絶えず新鮮な話題を提供してきたこと、さらには大部分の教科書で掲載されるようになってきたことも大きく作用している。

保存整備計画は平成4年度までに、国営公園部分について基本計画の策定が終っている。国営公園50haの周囲には県営公園63ha、さらに施設用地4haが配置されて、全体面積は117haとなることになっている。国営公園の基本的な考え方は、「弥生人の声が聞こえる」を基本テーマとして、「吉野ヶ里遺跡の保存を通じての本物へのこだわりと、忠実な施設の復元やわかりやすい手触りの展示などの遺跡の活用を通じて、弥生時代を体感できる場を創出すること」とし、もって日本はもとより世界への情報発信の拠点とする。」ことを基本理念とする。

さらに基本方針は次の7点に要約される。

1. 保存と活用——遺跡の保存をはかり、雄大な環濠集落などわが国の「クニ」の始まりと魏志倭人伝の世界を想起させる遺跡の全体的な特色を活かした整備を進め、わが

国が世界に誇る歴史文化公園とする。

2. 風景・環境——広く弥生時代の景観を感じさせる整備をはかり、強く心に残り、歴史のロマンが感じとれる魅力ある風景の公園とする。
3. 歴史・文化——国際的なつながりをもつ遺跡の多様で豊富な内容を、わかりやすく、詳しく理解できるよう、博物館などの展示施設や見学施設、体験・学習施設、研修施設等を整備し、楽しく学び、つどい新しい歴史文化を創造する公園とする。
4. 国際交流——世界の代表的な遺跡との連携をはかるなど、歴史文化を通じて世界の国々と相互理解を深め、国際交流の拠点となる公園とする。
5. レクリエーション——四季を通じて誰もが一日中気持ちよく楽しく過せるよう、ひろばや遊び場など憩い楽しめるレクリエーション環境を整えるとともに、多様な催しや親切な案内などサービス機能の充実をはかり、楽しい歴史文化公園とする。
6. 地域振興——広域観光レクリエーション

ネットワークの拠点としての役割を担い、まちづくりの核として、地域の活性化など地域に寄与する公園とする。

7. 段階的整備——今後の発掘調査、研究に基づいた整備を継続的に行い、長い時間かけて発展成長していく公園とする。

そしてこの基本方針を基に、具体的な整備は次の四つのゾーンに分けて行われる。

「環濠集落ゾーン」 環濠集落や墳丘墓など吉野ヶ里遺跡の中心となる主要な遺構が集中する地区。竪穴住居跡や高床倉庫、物見櫓といった建造物を数十棟復元するほか、墳丘墓と甕棺墓列の覆屋による露出展示あるいは復元展示、1.6kmをこえる環濠と土塁・柵の復元（一部露出展示）などが、その主な整備内容となっている。

「古代の森ゾーン」 環濠集落の北側丘陵部、甕棺墓列や奈良・平安時代の官衙的建物がある地区である。盛土し、往時の森の再現をはかり、森を通して様々な学習や生活体験などに親しめる場に整備する。

「古代の原ゾーン」 環濠集落西側の低地部にあたり、当時の水田跡が推定される地区。水田遺構の再現や、当時の草地の風景の再現をはかり、のびのびとしたオープンスペースの中で憩い楽しめる場とする。

「入口ゾーン」 吉野ヶ里丘陵東側の田手川をこえた低地部で、環濠集落への入口方面にあたる。主入口にふさわしい機能、環境を整え、資料館など情報サービス拠点として整備する。

他に細かな点は多々あるが、以上が吉野ヶ里遺跡の主な内容の概要である。

吉野ヶ里遺跡の整備は全体で117haに及ぶ。これは全国的にみても、過去の文化財保護行

政が経験したことのない、いわば初めての壮大な実験である。過去の見学者数700万人以上、さらに今後、吉野ヶ里遺跡を訪れる人達は何を求めてやって来るのか。そして行政側はこれにどう応えることができるのか。ありきたりのテーマパークにはない、確かな歴史的重みを最大の価値として、学術、観光、交流、さらには地域の活性化に吉野ヶ里遺跡の保存整備事業がどのように貢献できるか。地域における文化財活用の可能性が、今、試されようとしている。

●文化財保存整備の今日的意味

これまで見てきたように、佐賀県内三つの特別史跡をとっても、保存整備事業の展開は決して同じではない。遺跡の性格に基づく整備手法は勿論のこと、整備の実施に至るプロセスも目的も、置かれている状況も、それぞれである。当然ながら、それによってそれぞれの遺跡に対する整備のあり方も変ってくる。

基肄城跡は今のところ、とくに大きな開発にさらされる恐はないが、住民のつよい要望から整備計画がもち上がった。しかも大部分の主要遺構は構造物として目視できる遺存状態にあるから、整備そのものはあまり手を加える必要はなく、最少限度でいえば、必要面積の樹木伐採、遊歩道整備、簡単な案内施設程度でも、一般的な遺跡活用には十分用を果す。ただ、より多目的で、遺跡の価値、規模にふさわしい積極的活用を図ろうとすれば、もっとハードな整備内容にならざるをえない、ということである。

ところが、名護屋城跡並陣跡になると事情は変ってくる。20年ちかく以前、この一帯には農地改良事業が広範に計画され、大部分の

陣跡は破壊される運命にあった。町じゅう陣跡だらけといった土地である。今日の史跡を中核とした町づくりへの転換は、地元にとっても一大決心であり、それだけに、これらの遺跡整備に対する行政側の責任は重大であるし、地域の活性化に果たすべき遺跡の整備活用は、なかば宿命づけられた、長期にわたる事業展開となっている。

このような開発がらみの整備事業は他にも例が多い。例えば現在公有化途中有る大和町の史跡「肥前国庁跡」では、高速道インターにちかいことなどから周辺の開発がせまっており、将来的な見通しに立って公有化と保存整備の実施が急がれている。唐津市にある史跡「菜畑遺跡」や上峰町の県史跡「堤土塁」などでは、開発に備え、あるいは開発対象から除外した結果、公有化そして保存整備の実施が必要となった。もともと、全ての遺跡が保存整備事業を必要とするわけではない。遺跡によっては基本的に雑木林や畠のままで最少限の施設整備にとどめ、むしろ往時をしのびながら散策が楽しめるようなものもあってよいと思う。個人的な好みでいえば、私はそのような静かさの方が好きである。

しかしながら、現実には必ずしもそうはない。理由は第一に、遊歩道と簡単な説明板程度だと人々にして見学者の理解に役立たない場合が多いこと。対象が専門家ならいざしらず、何の予備知識のない一般の人に一定の情報だけを与えて遺跡の元の姿をイメージさせるのはなかなか困難である。そのため復元施設や、覆屋による露出展示、さらにはガイダンス施設など、よりハードな施設が最近の整備では多くなっている。

第二に遺跡公有化に伴う投資効果という経

済的理由がある。いかに緊急避難的措置とはいえ、買い上げた広大な土地を自然のままに、あるいは荒地のままに抱えていられるほど富裕な自治体はさほどあるまい。勿論、整備目的の公有化もあるが、開発に伴う遺跡保存のための公有化の場合は、その有効利用として整備活用が初めから宿命づけられているといえようし、一般の人が利用しやすい形で、文化財としての整備の枠をこえて、遊戯施設など多目的な価値が付加されることが多い。

さらに吉野ヶ里遺跡の場合は極端である。現在でも年間100万人をこえ、整備後は300万人と見込まれるとなると、整備は単なる文化財の整備だけには終わらない。誰もがわかりやすく学んでしかも楽しめる歴史公園として、かつてない規模のプロジェクトであるから、観光、関連産業など、地域の振興にとっても命運を賭けた大きな期待が寄せられている。当然、整備もそれなりの受け入れに応じたハードな内容になるし、アミューズメントな公園としての魅力が沢山盛り込まれなければならない。史跡整備が地域の活性化にどこまで寄与できるか、その最大限の可能性が今問われているのである。このことは、吉野ヶ里遺跡がその全国報道以来たどって来た経過、その歴史的価値、社会的意義などから整備方針として帰納される一つの結果であって、基肄城跡とも名護屋城跡とも違う固有のものであるといえよう。

以上述べたように、文化財の整備はそれぞれ置かれた位置によって、目的も手法もずいぶん変ってくる。それは何も佐賀県の三つの特別史跡にかぎるものではなかろう。すなわち、文化財本来の個性に加えて、地域性、社会的役割りが加わることにより、文化財整備

の個々の意味が変ってくるのである。それがまた、個々の文化財整備の魅力ともなりうるのである。

今日、各地でいわゆる地域づくり事業が盛んである。しかしながら、この「地域づくり」という言葉には地域活性化という意味が含まれており、ひいては地域特性を生かした“開発”から進んで、自然や伝統文化を破壊しかねない、ある意味では危険な要素を含んでいることも十分認識しておかねばならないであろう。「地域づくり」は地域それぞれがもつ自然や伝統文化を個性として生かし、快適な生活環境の創造に役立てようとする新しい運動であって、むしろそれまでの経済優先の地域開発への反省に立つものである。その意味では、文化財の整備活用が単なる観光目的、見せもの、あるいは演出をきかせたショーに一役買えばそれでよい、というものであってはならない。文化財の整備に、その重要な魅力の一つである個性を必要とするのであれば、まず、その文化財を十分調査し、歴史、性格を見極めることである。いたずらに、ましてや文化財の価値を損ねてまで不必要な“おもしろさ”を付加する必要は何もない。“本当のおもしろさ”は個々の文化財そのものの中にると断言する。

また、整備の対象、規模等については、ま

さに様々であって、市町村指定よりも県指定、県指定よりも国指定の方が整備効果が高いとはかぎらない。一国史に関わるようなものではないが、その地域にとっては誰もが親しみをもっているような文化財は沢山ある。外部から見学者がバスで押しかけるようなことはなくとも、地域住民にとってはふるさとのシンボルともいえる必安まる空間となっている文化財も沢山ある。要は、それぞれの地域において、その文化財が何であるかをよく見つめ、魅力を最大限に引き出すことであろう。それが本当の意味での地域づくりにおける文化財の活用であると考える。

今日、文化財をめぐる環境はあらゆる意味で複雑である。地域にとって文化財とは何であるか、保存整備によって地域づくりにおける文化財の可能性が試されるとともに、行政側にも住民側にも、今日、文化財の果たす意味が問い合わせられている。

著者略歴

氏名：Norie Tahira

学歴：東京教育大学修士課程卒

職歴：佐賀県教育庁文化財課

吉野ヶ里遺跡保存対策室室長補佐
著書、研究：基肄城跡、名護屋城跡、並陣跡
ほか発掘調査報告書、その他